

書評：P. ティリッヒ 字数：28×58＝1624

『宗教と心理学の対話——人間精神および健康の神学的意味』（相澤一訳）教文館
芦名定道（あしな・さだみち＝京都大学教授）

心の時代と言われる現代、心身の健康は、現代のキリスト教にとって無視できない問題である。牧会的カウンセリングが提唱されて、すでに久しい。ティリッヒは、この心の問題に先駆的に取り組んだ神学者の一人であり、本書は、こうしたティリッヒと心の問題との多面的な関わりを知ることでできる貴重な論文集である。訳者により、原著（『健康の意味』）から適切な文献が選択され、基礎論——人間精神および健康の神学的考察（第一部）、精神療法およびカウンセリングの神学的考察（第二部）、書評・人物評（第三部）、対話（第四部）に整理された。これによって、これまで、邦訳著作集の複数の巻に別々に収録されていた諸文献が、一冊の書物で読むことが可能になった。本書の第三、四部は、ティリッヒと精神分析家・心理学者との交流や影響関係について知る上で興味深い。以下、第一、二部を中心に、ティリッヒの心の神学の特徴を紹介することにしよう。

神学と心理学とはどのように関係づけられるのであろうか。精神分析学は神学の代わりとなることができるのだろうか。これについては、ティリッヒは次のように答える。或る人が医師と牧会者との二つの役割を同時に果たすことはあり得るが（「現実には医師はしばしば単なる医師以上のものであり、そして常に単なる医師以上であるべきである」）、しかし、これは、「この個人における一体性は機能が同じであることを意味するのではない」（202）、と。つまり、一人の人間において医師（医学・心理学）と牧会者（神学）は両立し得る、しかし、医師と牧会者の機能は混同されてはならない。この統一と区別に、わたしたちは留意しなければならないのである。

統一と区別を明確化するための基礎論として構想されたのが、「生の次元論」（本書第二論文「健康の意味」）である。健康、病、治療が問われる場を「生」と名付けるならば、この生を構成する、物質、生命、心、精神といった諸次元には、それに対応した固有の治療法、つまり特定領域の癒しの方法が存在する（機能の区別）。しかし同時に、諸治療法の間には、人間の全体的癒しに向けて、相互の共同作業が可能かつ必要なのである（統一）。したがって、キリスト教は、健康と癒しに関して、その固有の役割を果たしつつも、精神療法やカウンセリングと共同作業を行うことが求められるのである。

では、精神分析・カウンセリングと牧会心理学について、どのような議論がなされているのであろうか。いくつかのポイントを紹介して見よう。

まず、救いと癒しの不可分な関係性について。宗教については、魂の内的な救いのみが重視され、身体性や社会性は二次的であるかのような議論がしばしば行われてきた。それに対して、ティリッヒは、「救いは、愛を阻害する宇宙的な病いの癒しなのである。救い主は癒し主である」（16）と主張し、「神学はすばらしい賜物をこうした運動（実存主義運動と精神分析運動。引用者補足）から受けている」（98）ことを指摘する。心身の健康と癒しは、現代神学の重要課題なのである。

牧会心理学では、たとえば、現代人を悩ます罪責意識や懐疑が問題となる。現実に絶望し自己肯定が困難になること（現実の自己と真の自己の乖離の感覚を含め）は、日本の自殺者数にも反映している問題であるが、ティリッヒは、この現状に対して、自分が受容さ

れていることに気付くことの大切さ（受容されていることを受容すること）を指摘する。牧会とカウンセリングの共通の課題は、現代人が必要とする癒しのメッセージ（あなたは受け入れられているのだ）を人々に届けることなのであり、こうした課題に取り組んだテリッヒ神学は、暖かな生きる勇気の神学と云うるものなのである。

カウンセリングとキリスト教の関係、精神療法や牧会心理学といったテーマに関心のある方に、ぜひ、本書をお勧めしたい。